

平成 28 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 29 年 4 月 18 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	岩下明裕	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授
	2		
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	花松泰倫	九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・講師	境界研究（ボーダースタディーズ）、国境観光（ボーダーツーリズム）、国際法
	研究テーマ		
	対馬・釜山間の国境観光と境域社会の変容過程		

研究成果の概要

本研究は、稚内とロシア・サハリンとの間における国境観光（ボーダーツーリズム）の発展可能性と境界地域（境域）社会への影響、またそれによる国境の意味の変化の過程を、他の日本周辺境域である対馬と韓国・釜山、および八重山と台湾の間で展開する国境観光の現状および課題と比較検証することで明らかにすることが目的であった。この目的を達成するため、高田が稚内とサハリンを結ぶ国境観光モニターツアーの企画、実施に携わり、井潤が稚内サハリンの境界地域の現状と歴史を解説しながら参加者の反応を見る形でこのモニターツアーに同行した。また、島田は八重山と台湾を繋ぐ国境観光モニターツアーの企画、実施を行った。花松は対馬と釜山を結ぶ国境観光モニターツアー第3回を実施するべく企画したが、申込者が定員に達せず不催行となった。なお、これらの成果は月刊雑誌『地理』のボーダースタディーズ特集において、花松、高田、島田が論文にまとめている。

まず、稚内・サハリンの国境観光の発展可能性について、モニターツアーの際に実施したアンケート調査や参加者からの反応などから、大きな可能性があることが窺われた。ほとんどの参加者が旅行全体を「満足」と答えたが、国境への実感を伴った接近、国境があることで両国境地域間に生じる歴史、文化、言語、経済の差異に改めて気づいた点などがツアーの満足度を高める結果となった。これは同時期に実施した八重山台湾の国境観光モニターツアー、また 2015 年に花松が企画実施した対馬釜山モニターツアーでのアンケート調査結果の傾向とほぼ一致する。つまり、①国境を見る・感じる、②国境が生み出す両地域の差異を感じるという 2 点については、国境観光が成立発展する上ですべての国境地域に共通するポイントであることが明らかになった。

第2に国境（境界）地域社会への影響とその可能性についても、モニターツアーの実施を受けて

他の国境地域と同様の傾向が見られた。上記のように、国境付近を旅する、あるいは国境を越えて両地域を訪れることに特別のニーズが存在すること、外部者から見た地域の特性を、国境地域社会が気づく必要があるという点である。例えば稚内市内にロシア語の道路標識があり、展望台からサハリンが一望できること、樺太時代に日本によって建設された製紙工場跡などの廃墟に多くの日本人が訪れることなどである。稚内の観光関係者の中にはこのような「気づき」が浸透しつつあるものの、稚内の社会全体に同様の認識が生まれること、またサハリン側にも同様の気づきが生まれることが両国境地域の国境観光を発展させる鍵となる。他方で、稚内市が同じ境界地域自治体と連携を始めたこと、またサハリンとの観光に関する会議のなかで国境観光が取り上げられた点など、広域の観光連携が開始され、国境地域社会に影響を与える可能性がある。

最後に国境の意味・機能の変化について、これまでの「砦」「行き止まり」としての国境観からの転換の可能性が見出された。モニターツアー参加者の意見でも「サハリンが稚内のすぐ北にあるという当たり前の事実」「連続しているのに国境を引いたがゆえに文化や言語がすべて違うという不思議な感覚」への気づきがあった。つまり、対岸の国境地域であるサハリンと稚内を「繋ぐ」もの、他方でバリアや砦としての国境の機能ゆえに両国境地域に歴史的・文化的・経済的「差異」を作り出すもの、そしてこのような差異そのものが観光や国境地域全体にとっての「資源」となりうることで、他の国境地域での事例と同様に明らかとなった。この国境観の変化が国境観光の促進を通じて国境地域社会の変容をさらに促す可能性が示唆された。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

【著書・論文】

花松泰倫「対馬・釜山のボーダーツーリズムの展開：境界地域の資源としての国境」『地理』、第734号、44-51頁、査読無、2016年

花松泰倫「対馬と釜山を繋ぐボーダーツーリズム」岩下明裕編著『ボーダーツーリズム：国境のなかに光を観る』北海道大学出版会、査読無、2017年刊行予定（掲載決定済み）

井潤裕編著『稚内・北航路：サハリンへのゲートウェイ』、北海道大学出版会、全64頁、査読無、2016年

高田善博「北海道のボーダーツーリズムの展開：連携でボーダーツーリズムを創る」『地理』、第735号、62-69頁、査読無、2016年

島田龍「八重山・台湾ボーダーツーリズムの展開：実現までの取組から見えてきた普及・展開への課題」『地理』、第736号、68-75頁、査読無、2016年

【学会報告】

Hanamatsu Y, Developing Border Tourism and Changing Situation of Border Regions in Japan: The Case of Tsushima-Busan Cross-Border Tour, *Border Regions in Transition (BRIT), 15th Annual Conference, May 17, 2016, Hamburg, Germany*

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

科研費基盤研究（B）（研究代表）「東アジアにおける国境観光の比較研究：境域社会の変容過程と『隣国関係』への影響評価」（平成29～31年度）に採択済（岩下明裕、井潤裕が研究分担者）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。